

「牧師室」(2016年1月31日)

先週の「マナの会」では、三浦綾子原作の感動的な「塩狩峠」という映画をDVDで見ました。主人公は、鉄道員でしたが、不治の病で、長年病床にある女性との結婚をあきらめませんでした。彼女は、自分との結婚を諦めて欲しいと言いますが、何時までも待つ、と彼は言うのです。

主人公が「木は一本よりも二本の方が良く燃える」と言う場面が2度、3度ありました。昔カール・バルトと同世代のスイスの神学者エミール・ブルンナーが、教会の伝道を活い良く燃える炉の火に譬えたことがありました。教会は、伝道に精を出し、暖炉の火を消してはならない、と言うのです。

もう古い話になりますが、農村伝道神学校の校長や、教団の総幹事をなさった高倉徹牧師は、「伝道は、一種のムーブメントである」と言われたこと聞いたことがあります。その場合、教会は信仰者の一つの共同体であって、その中に、未信者の人を招く活動をするることになります。

上記の人たちのそれぞれの考えに一理があり、示唆的です。しかし、同時に大切なことは、わたしたちが、未信者の人や、友人・知人を招く場合、その人たちに何を語るか、メッセージとなるものを持っているかどうか、問われます。唯「教会に来て下さい」では、説得力に欠けるのではないのでしょうか。

塩狩峠の主人公、ブルンナー、高倉牧師、それぞれが、伝えるべきものを持っていることに間違いはありません。

今日は、年に一度の「教会全体協議会」があり、伝道をテーマに話し合います。短い言葉で、一人一人が自分のメッセージを語り合しましょう。